

# 仲道郁代

ピアノ・リサイタル

ブラームスの想念

The  
Ikuyo  
Nakamichi  
Road  
to  
2027

## 7つの幻想曲 作品 116

---

7 Fantasien, Op.116

- 1 カプリッチョ ニ短調 *Capriccio*. Presto energico (D minor)
- 2 インテルメッツォ イ短調 *Intermezzo*. Andante (A minor)
- 3 カプリッチョ ト短調 *Capriccio*. Allegro passionato (G minor)
- 4 インテルメッツォ ホ長調 *Intermezzo*. Adagio (E major)
- 5 インテルメッツォ ホ短調 *Intermezzo*. Andante con grazia ed intimissimo sentimento (E minor)
- 6 インテルメッツォ ホ長調 *Intermezzo*. Andantino teneramente (E major)
- 7 カプリッチョ ニ短調 *Capriccio*. Allegro agitato (D minor)

## 6つの小品 作品 118

---

6 Klavierstücke, Op.118

- 1 インテルメッツォ イ短調 *Intermezzo*. Allegro non assai, ma molto appassionato (A minor)
- 2 インテルメッツォ イ長調 *Intermezzo*. Andante teneramente (A major)
- 3 バラード ト短調 *Ballade*. Allegro energico (G minor)
- 4 インテルメッツォ ヘ短調 *Intermezzo*. Allegretto un poco agitato (F minor)
- 5 ロマンズ ヘ長調 *Romance*. Andante—Allegretto grazioso (F major)
- 6 インテルメッツォ 変ホ短調 *Intermezzo*. Andante, largo e mesto (E<sup>b</sup> minor)

# PROGRAM

## 3つの間奏曲 作品 117

---

3 Intermezzi, Op.117

- 1 変ホ長調 Andante moderato (E<sup>b</sup> major)
- 2 変ロ短調 Andante non troppo e con molto espressione (B<sup>b</sup> minor)
- 3 嬰ハ短調 Andante con moto (C<sup>#</sup> minor)

## 4つの小品 作品 119

---

4 Klavierstücke, Op.119

- 1 インテルメッツォ ロ短調 *Intermezzo*. Adagio (B minor)
- 2 インテルメッツォ ホ短調 *Intermezzo*. Andantino un poco agitato (E minor)
- 3 インテルメッツォ ハ長調 *Intermezzo*. Grazioso e giocoso (C major)
- 4 ラプソディ 変ホ長調 *Rhapsody*. Allegro risoluto (E<sup>b</sup> major)

# ブラームスの想念



## 人生を振り返る4つの曲集

2023年の秋のコンサートでは、ブラームスの晩年の小品たち、作品116、117、118、119を演奏します。私は20代の頃からこれらの作品に親しんできましたが、当時から、聴いても弾いても泣けていました。これら4つの曲集は、ブラームスが60歳頃、1892年から93年にかけて書かれたものです。亡くなる5年前のブラームスの晩年の境地があらわれたこれらの作品たちに、20代の私が泣けたということ。そして今、私自身もちょうどその頃のブラームスと同じ年齢となってまた泣けるというのは、考えてみれば興味深いことです。なぜ泣けたのか。それはこれらの作品のなかに、人生のなかでの「失う」という感覚を見出すからなのかもしれません。若い頃には若い頃なりに、その時にもっているものや、まだ見ぬものを失うということへの恐れがありました。そして今は、積み重ねてきた時間さえもすでに失われたものであるとい

うような、重ねてきたことと失ったこととは実は同じことなのだという、そんな感覚をこれらの曲から感じています。

ブラームスは約1年という短い期間で、これら4つの曲集を書いています。4つの曲集を次々と書き上げた、その背景には何があったのでしょうか。4つの曲集を書く約1年前の1891年、ブラームスは遺書を書いています。自分の死を見据えていたのです。そして作曲活動や演奏活動から身を引いていく準備もしています。ブラームスは若い頃からベートーヴェンを非常に尊敬し、完成された非の打ち所のないものとして作品を書こうとしてきたのだと思います。何度も書き直し、推敲を重ねて作品を発表してきました。そんな彼ですが、1890年に知人に宛てた手紙には、自分がもう歳を取りすぎたこと、精神的には何も書かないと決心したこと、そして自分の人生が十分に勤勉なものであったし、十分に達成されたと思うと書いています。その

ような心境のなかで書かれたこれらの作品では、以前のように完成された立派な作品を書くということではない、ブラームス自身の、内面を書き連ねたのではないかと思うのです。

ブラームスの人生に思いを馳せるときに、クララ・シューマンとの関係について考えなくてはなりません。ブラームスとシューマン夫妻をめぐる話はこれまでも多々語られてきたことですが、ブラームスとクララの間には、クララが亡くなるまでに、なんと44年間に及ぶ手紙の往還がありました。44年という長きにわたり、信頼・愛情・友情を絶えず積み重ねてきたというのは、驚くべきことです。その思い出のなかにあるさまざまな感情を思わずにはいられません。

そのような積み重ねを経てきたブラームスとクララですが、この時期、故人であるシューマンの作品の出版をめぐる誤解から、大きな行き違いが生じてしまいます。クララはブラームスの行動に激怒し、二人の間に不和が生じたのです。ブラームスにとってそれは全く意図しないことで、ブラームスには大変に辛い出来事でした。

人生の終わりを見据えたなかで負った大きな心の痛み。そのようななかで書かれたこれら4つの曲集を貫くテーマは、「人生を振り返る」ということなのではないかと私は考えています。思い出というのは、肯定や否定、入り混じったさまざまな複雑な気持ちの欠片たちがより集まって作られる万華鏡のようなものです。さまざまな思いが絡み合い、複雑な様相を呈するものですが、ここではそれぞれの曲集に見えてくるものから、私なりにテーマを考えてみたいと思います。

## ■7つの幻想曲 作品116

この曲に私なりのテーマを与えたとしたら、それは人生の終わりに近づくことへの心の動揺です。

第1曲の冒頭は、非常に衝撃的な始まりです。第2曲は移ろいながらも透徹した目線がありますが、人生の最後に向き合うなかでの悲しみも感じられます。第5曲はどこに向かうかわからないようなハーモニーです。どうしたらいいかわからない、どう受け止めていいかわからない、

とっているようです。

## ■3つの間奏曲 作品117

この曲集に見出すもの、それは心の傷、悲しみ、後悔、そして懺悔です。

第1曲の冒頭には、詩人ヘルダーが訳したスコットランドの詩が添えられています。

安らかに眠れ、我が子よ  
安らかに眠れ、美しく！  
私はおまえが泣くのを見るのは忍びない

ブラームスはこの作品について「私の苦しみの子守唄」と述べていたといわれています。第2曲も悲しみに満ちています。心の痛みをもっている人の悲しみの音楽です。第3曲にも、やはりヘルダー訳によるスコットランドの詩「ああ悲しい、ああ悲しい、谷へと降りていく」という言葉が添えられていた可能性があるともいわれています。

## ■6つの小品 作品118

この第3曲に「バラード」があり、第5曲に「ロマンス」があります。この曲集のテーマは、あえていうならば、愛にまつわる様相です。愛といっても、第5曲の「ロマンス」は、人間界の愛や恋というだけではなく、天上に高められたような愛であるかのようです。しかし最後の第6曲では、とてつもなく寂しく、悲しい曲になります。成就しない愛、もしくは成就するとかしないとかをも超えた、愛そのものの悲しみのようなものもあります。最初の音から行ったり来たりと渦巻くように、行き場のない思いが浮かんでは消え、浮かんでは消えます。

## ■4つの小品 作品119

この曲集の第1曲について、クララは「灰色の真珠」と称しました。その「灰色の真珠」から始まって、心がさまよう第2曲、人生のなかでの幸せな時間というものを感じさせる第3曲、

そして最後の第4曲では人生は讃えるべきものである、と語ります。寂しさとはこのようなものだ。人生は割り切れない。しかしそれを含めて人生であり、人生は讃えるべきものなのだ、と。けれども、そうわかっている、心の行き場はないのだと。そのような思いが聴こえてくるようです。

ブラームスはクララの誕生日に手紙を送ります。そこには「あなたとあなたのご主人は、私の人生において最も美しい経験でした。その経験には、最も豊かで、最も気高いものが表されているのです」と書きました。そしてクララは、

作品118と119を指して「あなたの小品集に免じて、私たちの友情を元の鞘に収めましょう」と、ブラームスを許したのです。

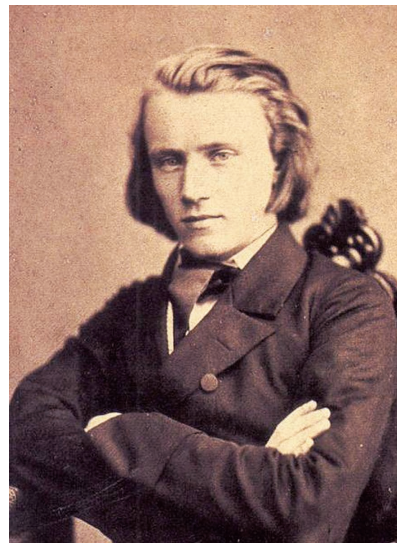
## 音と言葉 意味をもつ音の形

以上、4つの曲集に対しての私の思いを語りましたが、最近私は、音楽・音と言葉の境目が曖昧になってきたように感じています。音は言葉のようであり、言葉として発せられる気持ちは音楽ではこのようになるのではないか、と思えるようになったのです。それはおそらく、音

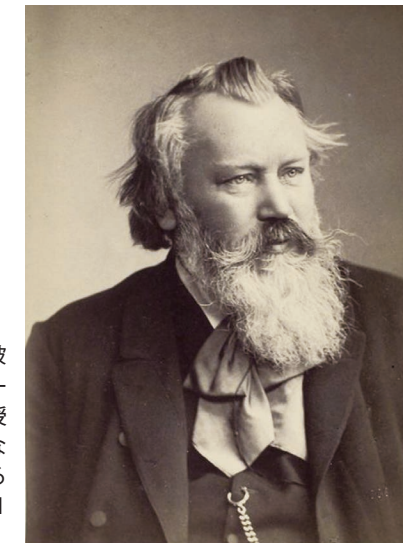
楽にある音の形、音の連なり方、音程、リズム、調性、それらが表現する意味があるからなのだと思います。この4つの曲集にも、意味合いをもつ音の形があると思います。例えば、**渦巻く音形**です。ひとつの音のまわりをうろうろと回っていたり、行ったり来たりするような音形が随所に出てきます。心がさまよい、考えあぐねるかのようです。また、**拍節をまたぐ音のつながり**も見られます。前の音が小節を越えてつながったり、どこが拍なのかがはぐらかされたりしながら、続いていくのです。割り切れない思いがそこにあるということです。そして、**下がっていく音形**です。どの曲でも音が下がって

いくのです。孤独や悲しみを吐露しているかのようです。このような音による意味が、この4つの作品からは聴こえてくると思います。

ブラームスの生涯において非常に特別な存在であったクララとの不和に加え、1892年には親しい友人が亡くなり、同年姉も亡くし、ブラームスは天涯孤独の身となります。そんなブラームスが、人生を振り返って、どのような思いをもったのか。今回の公演のタイトルである「ブラームスの想念」とは、ここからきています。つまり、人が人生を振り返るとき、人は何を思うのか、ということが、今回のテーマです。



1853年、20歳のブラームスと34歳のクララ・シューマン。この年ブラームスはデュッセルドルフのシューマン夫妻を訪問したことで作曲家としての道が開かれる。以降、シューマン夫妻はブラームスの人生の最も重要な人物であり続けた。特にクララは創作上の最大の助言者であり、愛情を捧げる存在であったが、二人は結婚の道は選ばず、44年に及ぶ友情を貫いた。



1889年、56歳のブラームス。この年彼はハンブルク市から名誉市民の称号、オーストリア皇帝よりレーオポルト勲章を授けられ、音楽家としての地位が揺るぎないものとなる。一方、自身の老いを感じるようになり、孤独感を強めていく。1891年には遺書をしたためている。



1850年、結婚10年を迎えたシューマン夫妻。精神を病んだ夫ロベルトは、この4年後にライン川に投身自殺を図って療養所に入所、1856年に亡くなる。以後、クララは7人の子どもを抱える母として、また傑出したピアニストとして生涯奮闘した。



1897年のブラームス。ウィーンの自宅の書斎にて。壁にはベートーヴェンの胸像が飾られている。前年5月にクララが亡くなると急激に体調が悪化し、後を追うように1897年4月3日朝、自宅で息を引き取った。

# 対談 ブラームスの音楽の言葉

## 仲道郁代 × 有田正広

The  
Ikuyo  
Nakamichi  
Road  
to  
2027

ブラームス晩年の内面を映し出すかのようなピアノの小品4作を取り上げる今回のプログラム。  
ブラームスの音が語るものは何か、古楽研究の第一人者でもある有田正広氏を迎えて語り合った。



### ブラームスの古典研究

**仲道:** 有田正広さんは皆さんもよくご存知の素晴らしいフルート奏者でいらっしゃる、そして古楽研究の第一人者でもいらっしゃいます。なぜ今日ブラームスのお話をご一緒するのかということですが、ブラームスはすごく古典を研究していたそうですね。

**有田:** そうなのです。彼自身クリュザンダーという音楽学者と一緒に18世紀フランスのクラヴサンの大家、フランソワ・クープランの楽譜の原典版の出版を行っています。また意外に知られていないのですが、彼は大バッハの息子、エマヌエル・バッハが所蔵した筆写譜や自筆譜を大量に保

管して、研究していたことがわかっています。ブラームスが18世紀の音楽、特に大バッハの研究に果たした役割の大きさが、今見直されているのです。

**仲道:** そうなのですね。

**有田:** そして彼はベートーヴェンを非常に敬愛していました。様式や理論といった古典的なものに、彼の関心は強く向かっていたと思います。

**仲道:** そんな古典的なものの考え方の要素、特に音楽の修辞学がブラームスの作品のなかでどのように活かされているかというようなお話も、今日はぜひ伺わせていただけたらと思っていま

す。ブラームスがこれらの作品のなかで一体何を語っているのかということ。そもそも音楽における修辞学とはどのようなものなのか、まずそこから伺えますか。

**有田:** 修辞学というのはもともと、古代ギリシアに起源をもつ弁論術でした。いかに自分の思いを相手に的確に、印象深く、そして感動をもって伝えるかということ。体系的に考えた学問で、相手の気持ちをしっかりとつかんで自分の言いたいことを言うというものでした。16世紀の終わりぐらいになって、この弁論術、喋り方の技法というものを作曲のなかに取り入れようという動きがでてきて、音楽にもその考えが応用されるようになりました。音のなかにもメッセージを込めるかということですね。音楽修辞学は作曲の技法としてまず入ってきて、17世紀から18世紀、そして19世紀の頭までずっと語られたんですね。ブラームスは19世紀の後半の人ですけれども、お話ししたように18世紀の音楽作品を出版したり、研究したりと古典に非常に造詣が深く、理解をしていた人なので、修辞法というのは当然知っていて、身につけていたわけです。

**仲道:** なるほど。ブラームスの作品のなかでそういった修辞法の考えが取り入れられて書かれているとしたら、演奏するほうからすると、ではこれらの音たちは何を意味するのかということを探すとつづいてになりますよね。音楽修辞学ではどんなところを見ていくのでしょうか。

**有田:** まずは音形ですね。「音形」というとある特定の形のことで狭義のものになりますが、その音形を超えた比喻のような、綾のようなものとして捉えるものです。もうひとつは狭義の意味で音の形として捉えるもの。作曲家がある音符を書くときに、そこに意味を込める。それを演奏する人が分かっていると意味として伝わるということですね。

**仲道:** それはドイツ音楽の伝統のなかに根づいていたということですか。

**有田:** ドイツとイタリア、フランスもそうですね。

### ブラームスと修辞学

**仲道:** 今回演奏するブラームスの作品について、私なりに受け止めていることがあるんです。例えば作品118-2。この作品を私なりにどのように読み取っているかということ。言葉をしてみますと、こんなふうになります。(作品118-2に下記の言葉をつけて弾き語り)

今の自分は静かで平和なのだと

でも振り返れば、音が、昔が  
優しく切なく蘇ってくる

いろいろなことがあった  
たくさんの出会いがあった

もしもあの時、何かが変わっていたら  
何か違っていたら

これほどの寂しさと悲しみを  
感じなくても済んだかもしれない

でも今は、後悔はしていない

自分を慰めてくれるのは  
大いなる自然と時の流れだ

—— けれども心はまだ揺れ動く

そこへ天から美しい声が降りてきて

「悲しむことはありません  
あなたは、あなたの人生を  
受け入れたのです」とその声に包まれる

—— けれども、心の傷はあまりにも痛い  
あまりにも痛くて、

いつの間にか  
心に蓋をすることを覚えてしまった

今は、すべては遠い薄明かりのなかに、  
おぼろげに感じられる

周りの人たちは、もうみんな  
逝ってしまった

懐かしくも過ぎ去った時

その失われた時は戻らない

美しい自然が、諦めのなかで、  
時の流れが自分を癒してくれる

今は、すべてを受け入れた静かな  
穏やかな気持ちのみが、残っている

仲道：これに、有田さんが修辞学を投影してご覧になると、どのように感じられるのかなと…。

有田：修辞学にはフィギュール（英語でいうとfigure）という考え方があります。これは音形などの形や、形を超えた比喩的なものですが、この作品のなかにいるんな性格を見て取ることができるわけですね。その観点から見ても、曲全体の物語を、仲道さんの言葉ですごく的確に表現なさっていると思ってびっくりしました。

例えば冒頭の部分。4分の3拍子で、アウフタクトから出ています。この場合のアウフタクトというのは「ため息」なんですね。

■ 作品 118-2 1～2小節

[今の自分は静かで平和なのだ]

※ [ ] 内は譜例の箇所あたりに対応する仲道の言葉。

Andante teneramente



仲道：まずため息があって、そして次に向かうと。

有田：このフィギュールは「ススピラツィオ」といいますが、最初は3度上に、次は7度上に、ため息をついてもっていくという形です。この音楽は最初は割と普通っぽく出てきているのですが、楽譜をよく見ていくと、例えば17小節のアウフタクトから、和音の変化を作りながら左手の動きが入ってくる。

■ 作品 118-2 17～20小節

[いろいろなことがあった たくさんの出会いがあった]



仲道：3拍目から始まっていて、3・1・2、3・1・2という形になっています。

有田：ブラームスは小節線を超えた書き方をしている。これはさまざまな思い、あるひとつの規定に囚われないでそれを超えていくということなんですね。

仲道：ここは「いろいろなことがあった たくさんの出会いがあった」と考えたところでした。

有田：まさにその通りなんです。そういうふうには書いてある。人の気持ちですね。演奏者も聴く人の耳も感情も全部ここに書き表そうとしています。

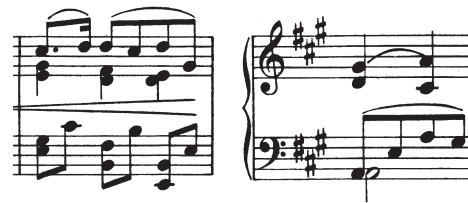
それから「愛のフィギュール」。これは3つの音でよく表すのですが、例えばハ長調で考えるとソシドという形。

仲道：ソとシがドへ解決するという形が、愛のフィギュールの基本であるということですね。

有田：そうです。これは友情や親子の愛情、もちろん男女の愛を含めてですが、その気持ちということですね。ひとつの音に帰結するというのは、愛、信頼の形というわけです。それがまず37小節目の2、3拍目のピアノの右手に出てきます。

■ 作品 118-2 37～38小節

[でも今は、後悔はしていない]



仲道：レド#レソ#ソ#ラと、ラに帰結しています。

有田：ところがレド#レと、これは少し迷いがあるんです。

仲道：このレド#レがあることによって迷って、でも愛の形でこのように収まっている。

有田：次に41小節目。ド#シソ#ラとあります。これが2回目。

■ 作品 118-2 41～42小節



仲道：さっきはレド#レソ#ソ#ラだったのが、今度はド#シソ#ラに変わっている。

有田：そしてここでは左手が多重奏のバスをもって、「キアスムス」となっている。「キアスムス」というフィギュールは複雑な、多重に渡る感情です。あるひとつの感情ではなくて、相反する感情。そこにメロディがあって、それで解決させるように書いています。そして45小節目のアウフタクトから3回目が出てきます。

■ 作品 118-2 45～46小節

[自分を慰めてくれるのは 大なる自然と時の流れだ]



仲道：つまり愛の形は3回出てきていて、そこにドラマがあると考えられるということ。

有田：3という数字のもつ意味というものがある、それは安定ということなんです。

仲道：揺れ動く愛の気持ち、平和というか、平穏な、安定するところへと向かっていくということを見て取ることができるということですね。

有田：はい。それから中間部にも「キアスムス」があります。49小節目です。

■ 作品 118-2 49～50小節

[—けれども心はまだ揺れ動く]



仲道：左手が3連符で、右手は8分音符。左手の3連符のなかにソプラノのメロディへの応答のようなものがあります。

有田：ここは単純にみると右・左で感情が交錯しています。けれども音的にはそれ以上のものが聞こえてくるように書いています。

仲道：心のなかの複雑さを表している。

有田：はい。あるひとつの結論をいうのではなくて、これもあり、あれもあり、これもありというふうに音楽がだんだん複雑になっていきます。

そして、これも驚いたのですが57小節目のピウ・レントから。

仲道：私が「天から美しい声が降りてきて」と言葉をつけたところですね。

■ 作品 118-2 57～59小節

[そこへ天から美しい声が降りてきて]



有田：まさにそうなんです。これはもう、コラル風の祈りですね。ブラームスはクララ・シューマンにこの作品118を捧げていますね。そしてこの曲と作品119でクララの許しを得るという。ですからクララへの気持ちというものがかかなりあったのかもかもしれません。

**仲道**：この作品118の5曲目は、4つの曲集のなかでは唯一「ロマンス」と付けられています。私は人間の恋だ、愛だというのとはちょっと違う感覚をもっています。

**有田**：普通「ロマンス」というと甘くて、美しく、とろけるような、誰もが分かるものですね。ところがこの曲では、誰もが分からないように書いています。面白いのはへ長調という調性です。へ長調というのは18世紀のさまざまな音楽家たちがこの調の性格からいうと最も美しく人の心のなかに自然に入ってくる美しい調性であると考えたんです。と同時にこれは田園を意味する調性でもあります。

**仲道**：ベートーヴェンの交響曲でも《田園》はへ長調ですね。

**有田**：ヨーロッパ人にとっては田園というのはただ田園の風景や、自然や、草がなびいて鳥がさえずる景色、というだけではなくて、イエス・キリストの生誕を意味するんですね。

**仲道**：なるほど。

**有田**：イエスは田園の小屋のなかで生まれていますよね。そこで生まれたということで、田園とつながっていくんです。同時に西洋人は17世紀から東洋哲学をヨーロッパに入れていく。そこからこの田園が彼岸にも結びついていった。ですからここでへ長調というのはそういった彼岸とのつながりもあると僕は思っています。

**仲道**：「ロマンス」といっても天上界の「ロマンス」というのか、そのような感覚をもったのは、へ長調という調性のもつ性格にもよるのですね。

**有田**：かもしれません。そして面白い書法なんですけれど、内声が随分ユニゾンで書かれてるんです。

**仲道**：はい。その上下をあたかもコーラルのようにハーモニーが流れていくという形です。

#### ■ 作品118-5 1～2小節



**有田**：ユニゾンというのは完全なる調和なんですね。しかも内声に書いています。ですから外側に表すことではなくて、内にあるということ、そしてそれが完全な調和となるという。

**仲道**：オクターブで完全に調和するユニゾンが中にあるって、外にコーラルがあり、天上界を表すような調性で描かれているというところに、どんな意味があるのかということですね。これはクララがこれを見ればすぐに分かるということですよ。

そしてこの後、曲集の最後の曲では、ラルゴ・エ・メストとなる。もう本当に悲しみのどん底であるというメストという言葉が書かれているのが、天上界の「ロマンス」の次に来て、それでこの曲集が終わる。非常に意味がありますね。

#### ■ 作品118-6 1～3小節



**有田**：非常に複雑です。始まりはある音の周りをうろうろとしている。

**仲道**：もうどうしていいかわからない、迷いですよね。

**有田**：この曲は、楽譜を見ていない人は何拍子か分からないですよ。わざとそのように書いているし、そして迷いのなかにフッと、突然左手で不気味ともいえるようなものが出てくる。心のなかに何かが訪れる。ブラームスは非常に深い闇のなかにそういった迷いを静かに収めようとしているのかもしれない。

**仲道**：この曲のなかで私が見つけた共通することのひとつが、このような渦を巻く音形です。

**有田**：これまで何度か出てきていますが、これも「キアスムス」です。ひとつにまとめることができないもの、相反して矛盾するけれども、矛盾するものがないと表現できないという、そういったものがこの曲のなかにありますね。

**仲道**：今回の4つの曲集、ほとんどすべての曲にそれがあります。それから、下がっていく音形。音がどんどん下がっていく。

**有田**：これは誰しも考えつくことだけれども、マイナス思考です。ネガティブな意味をもっている。修辞法のなかでは「カタバシス」というフィギュールの言葉があります。それに対して上がっていくのは明るさとか、ポジティブな意味をもつものとして「アナバシス」というフィギュールがあります。

**仲道**：この曲では下がるものが多いです。どんどん下がるばかりなり、という。曲の真ん中の中間部で、ふと上がって、明るいほのかな希望を見せるようなところがあっても、また最終的にどんどん下がってしまいます。それから、拍節をまたいで連なる音形も共通しています。

**有田**：連桁ですね。118-2でもたくさんありましたが、118の1曲目は、冒頭から左手が2小節間またがってしまっています。これなども典型的な長い連桁です。

#### ■ 作品118-1 1～2小節



**仲道**：これもまたいでいくという気持ちですね。

**有田**：そしてここでは、「デジデリウム」というのですが、憧れや願望、desireのフィギュールがあります。ドシラという音形、これはもう懇願していますよね。そしてこのなかには「スピラツィオ」も入っていて、大きなため息のなかに懇願が入っています。そのあと8分休符の一瞬の絶句。これは「アブルプツィオ」というフィギュールです。

**仲道**：アパッショナートとありますが、情熱をもって、ため息をもって、懇願する、ということですね。さらにドシラはクララを表す音 (C・H・A) ですし、もうこの曲は、クララへの心情吐露の手紙以外の何ものでもないと思います。

このように、書かれているものが修辞法に満ち満ちていると。ブラームスがすべてを意図的に書いたのか、思いを書こうと思ったらそうなったのかということのバランスは分からないですけども、修辞学で音楽を語るということはとても興味深いですね。

**有田**：先に述べましたようにブラームスは修辞学はよく知っている人だと思います。古典を非常に研究していましたから。ただやはりそこにだけ囚われると危険なこともありますね。元々修辞学というのは自分の思いを相手にいかに的確に伝えるか、人間の気持ちのいちばん自然なものを分かりやすく、皆の共通語としていうためのフィギュールというのがあると思うのです。ですから修辞学についてを知らなくても、音楽をちゃんと見ていけば当然そうなるはずですよ。

**仲道**：ブラームス自身も、作曲するというのがどんなことなのかと質問されたときに、作曲家が何か永遠の価値をもつものを書きたいと望むのであれば、やはり靈感のなかに見出すものがあるのだと言っていますね。その靈感と、作曲の技量、それは修辞学も含むと思いますけれども、その両方を必要とするのだということを語っています。

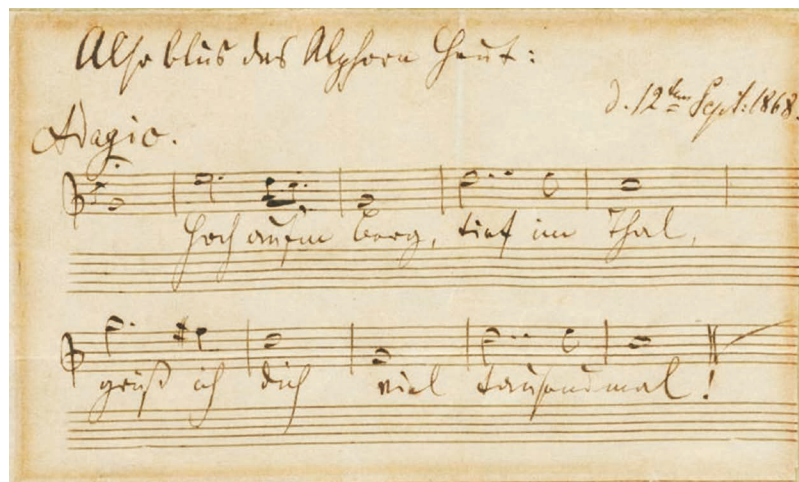
**有田**：インスピレーション、靈感というのは音楽をする上でなくてはならないもの、だけれど物理的なさまざまな技量、テクニックと合体しなければならぬ。

**仲道**：演奏する立場では、音符という記された記号から何を読み取るのか。その読み取るものは作曲家が靈感を得て書いたものなのですね。単に技量や方法だけで書いたものではなくて、素晴らしい世界にあるものなんだということを、

確認して、感じる。その作業を何度も繰り返して、音を出すという行為に結びつけていくことが演奏することなのだと思います。

**有田**：その通りだと僕も思います。

**仲道**：今回演奏するブラームスの音楽のなかに見出す思いというのは、ブラームスがこういう思いで書いた、それを受け止める私がこういう思いで弾くということもありますし、なおかつ聴いてくださる方それぞれの思いのなかに、また違うように聴こえてくるものがあると思います。それはお聴きくださるその方それぞれの人生が、経験が、思いが異なるからだと思うのですけれども、きっと必ず、これらの曲のなかに、気持ちの重なりをお聴きいただくことができるのだと思います。これらの曲のなかに共感を見つけることによって、何か心が救われるような思いを抱いていただくことができるのかなと思います。



1868年にブラームスがクララの49歳の誕生日のお祝いに書き贈ったもの。Hoch auf'm Berg, tief im Tal, grüß ich dich viel tausendmal! (高い山と深い谷から、あなたに何千回もの挨拶を送ります)という言葉が添えられている。このメロディは、その8年後、1876年に初演された交響曲第1番（20年以上もの歳月をかけて完成させた）の第4楽章の重要な場面で、ホルンで印象的に奏でられる。そして冒頭のミレドソの下行音形は、118-1の冒頭でドシトラミの音で現れる。(ドシトラはクララを表す)

**有田正広** [ありた・まさひろ]

フルート奏者、古楽研究者。第40回NHK・毎日音楽コンクール第1位（フルート部門）、ブルージュ国際音楽コンクール第1位（フラウト・トラヴェルソ部門）。1989年、古楽器による「東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ」を創設、その指揮者としても活躍。古楽器の演奏と研究・解釈の両面で大きな功績が認められ、第21回サントリー音楽賞を受賞。録音は「ドイツ・バロックのフルート」（レコード・アカデミー賞部門と文化庁芸術作品賞）等多数リリース。昭和音楽大学教授、同ピリオド音楽研究所所長を歴任。現在、桐朋学園大学特任教授。

The Road to 2027公演スケジュール

## 2024年 [春のシリーズ] 夢は何処へ



2024年5月11日(土)  
アクティシティ浜松 中ホール  
問合せ: 浜松市文化振興財団 053-451-1114

2024年5月19日(日)  
兵庫県立芸術文化センター  
KOBELCO 大ホール  
問合せ: 芸術文化センターチケットオフィス  
0798-68-0255

2024年6月2日(日)  
サントリーホール  
問合せ: ジャパン・アーツ ぴあ 0570-00-1212

曲目  
ベートーヴェン:  
ピアノ・ソナタ第27番 Op. 90  
ベートーヴェン:  
ピアノ・ソナタ第13番 Op. 27-1  
ベートーヴェン:  
ピアノ・ソナタ第14番「月光」Op. 27-2  
シューベルト:  
ピアノ・ソナタ第18番「幻想」D894 Op. 78

## 2024年 [秋のシリーズ] シューベルトの心の花

曲目  
シューベルト:  
4つの即興曲 D899 Op.90  
シューベルト:  
4つの即興曲 D935 Op.142

2024年9月14日(土)  
長岡リリックホール  
コンサートホール  
問合せ: 長岡市芸術文化振興財団 0258-29-7715

2024年9月15日(日)  
サントミューゼ 小ホール  
問合せ: 上田市交流文化芸術センター 0268-27-2000

2024年10月5日(土)  
アクティシティ浜松 中ホール  
問合せ: 浜松市文化振興財団 053-451-1114

2024年10月12日(土)  
宗次ホール  
問合せ: 宗次ホールチケットセンター 052-265-1718

2024年10月27日(日)  
東京文化会館 小ホール  
問合せ: ジャパン・アーツ ぴあ 0570-00-1212



# 仲道郁代 The Road to 2027

リサイタル・シリーズ

全プログラム

春のシリーズ  
秋のシリーズ

The Ikuyo Nakamichi Road to 2027

## パッションと理性

モーツァルト：  
ピアノ・ソナタ K.310  
ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第23番  
「熱情」 Op.57  
ブラームス：  
ピアノ・ソナタ第3番 Op.5

2018

ショパン  
～プレイエル響き～  
ショパン：  
バラード第1番 Op.23、  
バラード第2番 Op.38、  
バラード第3番 Op.47、  
バラード第4番 Op.52、  
24の前奏曲 Op.28

## 劇場の世界

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ  
第19番 Op.49-1、第20番  
Op.49-2、第18番 Op.31-3  
シューマン：パピヨン Op.2、  
謝肉祭 Op.9

2023

本公演

## ブラームスの想念

ブラームス：7つの幻想曲 Op.116、  
3つの間奏曲 Op.117、6つの小品  
Op.118、4つの小品 Op.119

## 悲哀の力

ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」  
Op.13  
ブラームス：8つのピアノ小品  
Op.76  
シューベルト：ピアノ・ソナタ  
第19番 D958

2019

## シューマンの夢

シューマン：  
アレグロ Op.8、幻想小曲集  
Op.12、予言の鳥 Op.82-7、  
ピアノ・ソナタ第1番 Op.11

2024

## シューベルトの 心の花

シューベルト：  
4つの即興曲 D899  
Op.90、  
4つの即興曲 D935  
Op.142

## 音楽における 十字架

ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第22番 Op.54、第21番  
「ワルトシュタイン」 Op.53  
ショパン：2つのノクターン Op.48  
シューマン：  
ピアノ・ソナタ第3番 Op.14

2028年3月に延期（会場未定）

2020

## ドビュッシーの 見たもの

ドビュッシー：前奏曲集 第1巻、映  
像 第1集、映像 第2集、喜びの島



「The Road to 2027」からの  
初のライブ・レコーディング

2025

## ラヴェルの狂気

ラヴェル：鏡、水の戯れ、  
夜のガスパール

2026

## ラヴェルの狂気

ラヴェル：鏡、水の戯れ、  
夜のガスパール

## 幻想曲の系譜

～心が求めてやまぬもの～  
モーツァルト：幻想曲 K.475  
シューマン：幻想曲 Op.17  
ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第28番 Op.101  
シューベルト：さすらい人幻想曲  
D760 Op.15

2021

## 幻想曲の模様

～心のかげらの万華鏡～  
ブラームス：2つのラプソディ  
Op.79より第1番  
シューマン：クライスレリアーナ Op.16  
ショパン：幻想曲 Op.49  
スクリャーピン：12のエチュード  
Op.8より第1番、第12番、  
幻想曲 Op.28

令和3年度  
文化庁芸術祭  
「大賞」  
受賞

2026

## 組曲～調和と心慮～

グリーグ：組曲「ホルベアの時代より」  
Op.40  
バッハ：パルティータ第1番  
BWV825、第2番 BWV826、  
イタリア協奏曲 BWV971  
ラヴェル：クーブランの墓

2027

## 変奏曲

～生の命題を編む～  
モーツァルト：きらきら星変奏曲 K.265  
シューマン：アベッグ変奏曲 Op.1  
ラフマニノフ：  
コレッリの主題による  
変奏曲 Op.42  
ベートーヴェン：創作主題による  
32の変奏曲 WoO.80  
ブラームス：  
ヘンデルの主題による  
変奏曲とフーガ Op.24

## 知の泉

ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」  
Op.31-2  
ショパン：バラード第1番 Op.23  
リスト：ダンテを読んで S.161-7  
ムソルグスキー：  
組曲「展覧会の絵」

2022

## 前奏曲～永遠への兆し～

ドビュッシー：前奏曲集 第2巻  
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23より、  
第2番・第5番・第7番  
前奏曲集 Op.32より、第2番・第5番・  
第8番・第10番・第11番・第12番  
前奏曲「鐘」 Op.3-2

## 生と死の揺らぎ

ショパン：  
ピアノ・ソナタ第2番「葬送」 Op.35  
ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第29番  
「ハンマークラヴィーア」 Op.106

## 変奏曲

～生の命題を編む～

モーツァルト：きらきら星変奏曲 K.265  
シューマン：アベッグ変奏曲 Op.1  
ラフマニノフ：  
コレッリの主題による  
変奏曲 Op.42  
ベートーヴェン：創作主題による  
32の変奏曲 WoO.80  
ブラームス：  
ヘンデルの主題による  
変奏曲とフーガ Op.24

# 仲道郁代 Official YouTube Channel



仲道郁代の各種動画を配信しています。  
ぜひご覧ください。

## 「ブラームスの想念」関連動画

仲道郁代 プログラムを語る【ブラームスの想念】  
対談 仲道郁代×有田正広  
～ブラームスの音楽の言葉～



## The Road to 2027 の関連動画

2020年 秋のシリーズ  
「ドビュッシーの見たもの」



2021年 春のシリーズ  
「幻想曲の系譜～心が求めてやまぬもの」



2021年 秋のシリーズ  
「幻想曲の模様～心のかげらの万華鏡」(対談)



2022年 春のシリーズ  
「知の泉」(アナリーゼ)



2022年 春のシリーズ  
「知の泉」ムソルグスキー《展覧会の絵》より《キエフの大きな門》



2022年 秋のシリーズ  
「前奏曲～永遠への兆し」(鼎談)



2023年 春のシリーズ  
「劇場の世界」(アナリーゼ)



2023年 春のシリーズ  
「劇場の世界」(対談)



**YAMAHA**  
Make Waves



**CFX**  
Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載    
Pianist Lounge. <https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

株式会社ヤマハミュージックジャパン

## 仲道郁代のドイツ・ロマン派 @RCA RED SEAL



仲道の「音楽の故郷」、シューマンへの帰還。



**シューマン:  
ファンタジー**  
¥3,300(税込)  
ハイブリッドディスク  
● SICC 19008

音響効果抜群のノイマルクトで収録された仲道郁代のデビュー盤。



**公演曲収録**  
**シューマン:  
グランド・ソナタ**  
**ブラームス:  
3つの間奏曲 作品117**  
¥2,136(税込)  
CD ● BVCC 1088

ドイツ・ロマン派の名品が織りなす美しい響き。



**公演曲収録**  
**ロマンティック・  
メロディ**  
¥3,204(税込)  
CD ● BVCC 34011



仲道郁代が辿る、深遠かつ多様なベートーヴェンの音世界。  
**仲道郁代 ベートーヴェン集成  
～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集** **17枚組  
完全生産  
限定**  
¥19,800(税込)  
12CD+3ハイブリッドディスク+2DVD ● SICC 39032~48



ドビュッシーが心に投影した理想の響きがここに。  
**ドビュッシーの見たもの  
前奏曲集I・映像I/II・喜びの島**  
¥3,300(税込)  
ハイブリッドディスク ● SICC 19053

Sony Music Japan International

# 心が躍る、味わいを。

美しい音楽は、心を豊かにし、  
特別な時間を与えてくれる。  
私たちハウス食品グループは、心が躍る音楽のように  
食を通じて人生を喜びあふれるものになりたい。  
人と笑顔をつなぐ、  
皆さまのグッドパートナーを目指して。



## 暮らしを彩る、レイノーの輝き。

1849年、フランスリモージュ地方で生まれたレイノー。  
創業以来、フランスを始め世界各国の王室や著名なレストランと  
共に歩んできました。エレガントな輝きとこだわりのデザインは、  
今も多くの人々から愛されています。

## ERCUIS RAYNAUD

エルキュイ・レイノー青山店

東京都港区北青山3-6-20 KFIビル2F  
Tel.03-3797-0911 <https://ercuis-raynaud.jp>  
ハウス食品グループ本社株式会社は、レイノー社製品の総輸入販売代理店です。

ホームページは  
こちらから



食でつなぐ、人と笑顔を。

 **House** ハウス食品グループ

## The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「ブラームスの想念」  
2023年10月22日(日) 開演 14:00 東京文化会館 小ホール

主催：ジャパン・アーツ

協賛： **House** ハウス食品グループ

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハミュージックジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ  
デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス  
編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ  
表紙写真：ヒダキトモコ